ＭｔＦレズビアン（自認）ですけど男子寮に三年間住んでみた

倉井香矛哉

二〇一三年二月一一日、——卒寮式の約一週間まえのこと。電車のなかで子鹿のぬいぐるみ（ストラップ）を失くしてしまった。いっしょに活動している朗読家が旅行に行くというので、せっかくの機会だからと撮影機材を貸しだすつもりで、寒い季節のことだから、降りの電車の座席のうえでやりとりをしてしまった。降りるときに慌てがちなのだから、そんなことは避けるべきだった。

それから一週間、思いあたる場所はすべて探した。東京メトロの忘れ物センター、途中で立ち寄った雑貨屋さん、そのあと乗り換えたＪＲ線の駅構内。……だけど、見つかることはなかった。

たかが「ぬいぐるみ」じゃないか、と思うかもしれない。だけど、ぼくには、「モノとヒトを区別して考えることはできないのではないか」と思えてならない。たとえばもし、ごく近未来に、かぎりなく人間そっくりのロボットだとか、クローン人間だとかが眼のまえに現われたとして、ぼくたちは、「彼ら／彼女ら」を人格的存在として承認すべきかどうか。あるいは現実の話だが、人間同士であっても、肌の色とか、宗教のちがいで道具存在のように使役したり、容易に殺しあったりしているのは、いったいどういうことなのか。

これは私見だが、ぼくたちが考えている他者性とは、自己の〈外部〉として確信されるだれか／なにかに対して、なかば自分勝手にそのように名指している、——言い換えると、恣意的に分節化しているにすぎない。だから、〈他者〉とのかかわり方は、一人ひとりの価値観だとか、世界認識だとかによって、それぞれに異なるのが当たりまえなのだ。ぼくは、たとえ「ぬいぐるみ」であろうが、群れからはぐれた一匹のことを探し訪ねる人生を選びたいと思っている。それこそが、文学者としての生き方だと信じているから。

さて、卒寮式の当日。美容のための些細な手術で、式の前日でしか予約が取れなかったものだから、顔面創痍の状態で話